この夏、久しぶりに教え子に再会した。彼女が小学校を卒業して以来かもしれない。私は、小学３年生のときの彼女の姿を、今でも鮮明に覚えている。

理科の時間。トンボの幼虫であるヤゴを観察しながら、昆虫の成長の仕方について学習していたときのことだ。

彼女は、積極的に自分の考えを表現するタイプではなかった（いや、私が一方的にそのような理解をしていたのだが・・・。）そんな彼女が、ヤゴを観察していたときに、突然、自分を表出しだしたのである。

「なんで？　なんで？　なんで？」

突然のこのつぶやきこそが、私の長期記憶になっている理由である。

私は彼女に、「なんで？　なんで？　なんで？」の理由を聞いてみた。

「ヤゴは、トンボの幼虫でしょう。トンボは成虫になると、空を飛ぶのに、幼虫のときは、どうして水の中で生活しているのか。」ここが不思議でたまらないらしい。

私も不思議がっている彼女を楽しみ、彼女の不思議を学級全体に紹介した。すると、多くの友だちが彼女の不思議に共感し、授業は「なんで？」の渦に巻き込まれていったのである。

このときをきっかけに、彼女は自分の考えを積極的に発言するようになった。後に彼女は「それまで自分は、猫をかぶっていた」と表現するのだが、自分の不思議をみんなが共感してくれたことがきっかけになったことは間違いないらしい。

アメリカの生物学者であったレイチェル・カーソンは、その著書『センス・オブ・ワンダー』で、子どもは生まれながらに神秘さや不思議さに目をみはる感性をもっていること、さらに、感動を分かち合ってくれる大人がそばにいることの重要性を述べている。

そのとき、そこには、彼女の「なんで？」を分かち合える雰囲気があったのかもしれない。

久しぶりに再会した彼女は、今、大学で理科の教員を目指しているという。

彼女と再会して、私はある学校の壁に飾ってあった先輩の言葉を思い出した。

「あなたの小さなうなずきで、子どもが大きく育っています」